

令和2年度第1回都市科学部運営諮問会議議事録

日時 令和3年3月12日(金)15時00分～16時59分

場所 事務局本部棟3階 第1会議室

出席 平野雅之、宮坂久美子、赤井英明、青木優介（リモート参加）、川添裕（主宰）、
勝地弘、周佐喜和、藤掛洋子（陪席）

欠席 なし

議題

1. 議事録等の確認

川添学部長から、資料1にもとづき、委員の紹介が行われ、資料2にもとづき、令和元年度第2回都市科学部運営諮問会議議事録の確認があり、原案のとおり承認された。資料3にもとづき都市科学部運営諮問会議評価シートの説明が行われた。

2. 令和2年度に係る評価について

(1) 都市科学部における学生の受入れについて

川添学部長から、資料5にもとづき、都市科学部における学生の受入れについて、以下の説明があった。

- ・今年度本学は個別入試を行わず共通テストだけで合否判定を行った影響により、受験者および志願者数が激減した。ただし非常に特殊な状況で、既に終了している前期日程の合格者のスコアで見ると、例年より1～6%高い数字になっている。
- ・今年度から帰国生徒選抜という入試を開始した。

(2) 都市科学部における広報について

川添学部長から、資料6-1にもとづき、オンラインオープンキャンパスの実施状況について説明があった。

- ・1日当たりの参加者としては、対面で実施している年と同等の人数の参加があった。開催後もオンデマンドの形でウェブ上に動画等を掲載しており、参加できなかった方も視聴できる工夫を行っている。
- ・オンラインで開催したことにより、地方からの参加者が10%増加した。
- ・多数のプログラムを開催できることなど、今後も対面とリモートを併用するメリットはあると考えられる。

資料6-2にもとづき、夢ナビライブ2020について説明があった。

学生のリクルートのために、「夢ナビライブ」というイベントに継続して参加している。今年度も1名の教員を派遣した。

資料6-3にもとづき、都市科学部ロゴマーク公募について説明があった。

コロナ状況の中で、意欲的な楽しい企画を行う目的で学部のロゴの学生公募を行った。

入賞作は学部のイベントや行事で活用している。

資料6-4にもとづき、ウェブサイトのレスポンス対応化について説明があった。都市科学部ウェブサイトの、スマホからの見え方の改善・改革を行った。オンデマンド・オープンキャンパスの継続やTwitterの埋め込み、動画の公開などコンテンツを充実させている。アクセス数から見ても、スマホからの閲覧が伸びており、改善の成果が見られる。

(3) 新型コロナウイルス対応の工夫・学生ケアについて

川添学部長から、資料7-1～7-6にもとづき、新型コロナウイルス対応の工夫・学生ケアについて説明があった。

・今年度の授業はリモートが中心であったが、秋学期はコロナ対策の条件を満たした授業を対面で行った。実習・演習系の授業を中心に、リモートでの実施が難しいものについて工夫をしながら対面で行った。

・入学してから大学に来ることができていない1年生全員を対象に、8月に個別面談を実施した。危惧していたよりは元気であったが、人間関係の構築の難しさや、交流の機会を求めているといった課題が明確になった。秋学期からは課題の質や量の調整を行うことや、課題へのフィードバックをすることの意識共有を行った。また、秋学期の始め頃にオリエンテーションを兼ねたキャンパスツアーを実施した。

・学生発案で、1年生を支援するオンライン企画を実施した。履修相談会や、交流会、オンライン見学会など、趣向を凝らした企画が催された。

・教職員と学生が語る会、という会を開催し、気軽に教職員と学生が話しコミュニケーションを取れる場を作った。

(4) 都市科学部における教育について

川添学部長から、資料8-1～8-7にもとづき、都市科学部における教育について説明があった。

資料8-1にもとづき、「都市科学A、B、C」授業アンケート説明があった。

資料8-2にもとづき、都市科学部オンライン・キャリア支援セミナーについて、内定の出ている4年生から、オンラインで3年生以下に対して、就活の体験やアドバイスを行ったという説明があった。建築学科と都市基盤学科では、別途学科で行っている。

資料8-3にもとづき、IR学生意見交換会について、横浜市が推進している統合型リゾートについての意見交換会を、横浜市と共催する形で遠隔で行ったという説明があった。

資料8-4にもとづき、都市科学C特別講演会について、都市科学Cの授業の枠組みの中で、遠隔で横浜市副市長の小林一美氏に、「横浜市を取り巻く状況と今後の都市づくりの方向性」というテーマで講演してもらったという説明があった。

資料 8-5 にもとづき、『都市科学事典』・都市科学シンポジウムについて説明があった。都市科学は確立された分野ではなく、切り開いて成立させていくものである。学部開設時に、都市科学の事典を作ることを決め、4年間かけて刊行に至った。来年度からは事典を活用しながら教育を行っていくことになる。

刊行を記念して、「トランジション・シティ 都市をめぐる知の交差」というテーマでシンポジウムを行った。

資料 8-6 にもとづき、2021 年度海外留学支援制度（協定派遣）採択について、説明があった。

資料 8-7 にもとづき、研究室におけるグローバルな活動について、藤掛教授がオンラインでパラグアイとの交流を実施したことの説明が行われた。

（5）その他の事項について

川添学部長から、資料 9-1～資料 12 にもとづき、設備・施設等の整備、財務基盤および管理運営体制、内部質保証システムについて説明があった。

- ・ 点在していた事務室を、一か所に集約した。
- ・ 2021 年度の予算を獲得できたため、都市科学部講義棟の大規模改修を行う。
- ・ 最大 4 教室に中継し、さらに自宅等からも視聴できる遠隔講義システムを導入した。
- ・ 都市科学部講義棟のエントランスにベンチを設置した。
- ・ 4 年生までが揃ったため、配分予算がこれからは横ばいになる見込みである。

3. 都市科学部への期待・提言

委員との間で下記の意見交換が行われた。

赤井委員

高校では、大学に進学する生徒の指導が大きな割合を占めている。川和高校では理工学部へ進学する割合が 30%～35%、そのうち女子生徒が 1/3 を占めている。キャリア教育の視点で生徒と接している中で学際的な分野の垣根がだんだんなくなって、学際分野の科目が拡大していると感じる。都市科学部では何を勉強するのか、旧来の建築系学部とどう違うのかという質問を受ける。そういう状況下において、様々な方法による広報活動が充実していて、見るほどに興味を湧く生徒が出てくると思うので今後もぜひ継続して取組んで欲しい。その中で、従来ある学部との違いや、横浜国大としての色を出すことで、さらに多様な地域から学生が集まるのではないかと思う。

また、今までの教育では課題解決型の勉強が主流であったが、これからの時代は課題の発見がテーマとなってきており、取り組みが行われている。そういう中で、都市科学部の取り組みはここで勉強したいという興味を湧かせるものだと感心している。

学生目線のきめ細かい心遣いが感じられた。一人一人へのケアや学生間の交流を実施し、教員からのアプローチを通じてコミュニケーション力の開発をコロナ禍でもしっかり行っているところは、評価できる。

川添学部長

都市科学部は文理融合に特に意識して取り組んでいる。さまざまな議論があり、先日の都市科学シンポジウムにおいては、文理融合はあり得ず、文理「複眼」が正確ではないかという意見が提示された。いずれにせよ複数の視点から見るのが大事で、文系と理系や、理系の中でも都市基盤・建築・環境リスクは違っていて、それらが都市という場集積しながら複合収斂していくわけである。

課題解決型の授業は、地域課題実習という多数のプロジェクトを立てて、それぞれで課題解決型の実習を全学で行っている。どの学部からも履修できるが、履修者の7割が都市科学部生で、地域の課題解決を志向する学生が集まっている。学科のプロジェクトでもそれに応えられるよう考えている。今年度はコロナ状況で実現できなかったが、来年度は「羽沢横浜国大駅とキャンパスを都市科学する」というプロジェクトを立ちあげようとしている。

宮坂委員

コロナ禍での授業が大変だったと思うが、学生のメンタルケアの工夫が素晴らしいと感じた。自殺率が高まっていること、特に若い方の比率が高まっていることを県としても危惧している。健康診断など通常行っていることが抜けるのも怖いと思う。心のケアについて、公式に学部としての相談窓口を用意し、相談しやすい工夫があると良いと思うが、何かあれば教えてもらいたい。あるのであれば、引き続き継続するのが良いと思う。ウェブサイトで見たが、緊急生活支援の奨学金はとても大切な取り組みだと思う。今後も状況が続くかもしれないため、メンタルのケアは注意して、これからも尽力するのがよいと思う。

コロナを題材にした授業など、面白い取り組みがあれば教えて欲しい。県の仕事で上がっている話題として、外国人のコミュニティーにコロナの情報が伝わりづらく、そこでの感染を心配していることや、東京から移り住む方が増えていて、町の在り方やリモートワークに適した空間を提供できないか、といったものがある。

今年の入試をどう考えるかを聞きたい。共通テストのスコアが高くなったのは分かるが、個別試験でアドミッションポリシーとの親和性を見ていたと思うので、入試と人材育成について考え方を聞きたい。

川添学部長

メンタルケアは、学長の全学的な注意喚起もあり自殺者を出さないよう気にかけてきた。いろいろな機会に、授業に長く参加していない学生がいたら気にすることなど学部としても取り組んできた。

健康診断は、時期を遅らせて、密にならないよう人数や場所を分散して実施した。全員受診という形で実施している。

コロナを題材にした授業は全てを把握できていないが、分かっているものとして、外国人や外国人につながる子供たちの教育生活相談支援をしているNPOの方に授業をお願いし、意欲のある学生の何人かはNPOの現場に足を運んだ。外国につながる子供たちと接しながら、その子供たちが抱えている困難を知り、話を聞くことや勉強を教えるといった活動を行った。

個別試験を実施しなかった影響について、アドミッションポリシーが不確かになる要素があったことは否めない。ただし、実施しないことを決定した際に全学部一斉に受験生

ヘアドミッションポリシーをよく読むようメッセージを発している。学部で学ぶ内容や各学科が何を狙っているのかを発信し、強調してきたと考えている。また、4月に入学生に対して必要な補習を行うことが決定している。

平野委員

コロナ禍の1年で対面授業ができず、サークル活動等を通じた友人との触れ合いが分断されてしまった中で、メンタルを含めた健康に留意して授業の実施や大学生活を送ってもらう苦勞が大変だったと思う。工夫して対応したことが良く分かった。都市科学部が初めての卒業生を出すところでコロナという大きな変化があり、今後の講義などを通じて世の中にどんな変革をもたらしたのかということ議論していければ良いことだと思う。

相鉄としても、一昨年11月末に相互直通線が開通して羽沢横浜国大駅ができたが、コロナにより機能が十分に活かされないまま1年が経ってしまった。通販の拡大により今後商業施設にお客様が集まるのか、事業に大きな影響がある。都市科学の観点からビジネスや町の在り方にどのような影響が出るのか非常に興味を持っている。

また、コロナにより強制的にオンライン化やリモートワークといったものが推し進められた。在宅勤務や遠隔で打ち合わせを実施して、いい点や悪い点が出てきている。大学の授業においても、対面の方が良い部分と、オンラインの方が良いと感じる部分があると思う。新しい授業や講義の在り方について、変わる部分を感じているのであれば伺いたい。

川添学部長

これからの都市がどうなるかというのは難しいテーマであるが、個人的な意見では、都市への人の集中は古代ギリシャ以来、人類史のなかで続いている。様々な感染症が流行しても都市へ集中してきているので、その大きな流れは変わらないと思う。ただ修正は必要で、とくに都心部と郊外部の関係、つながり方は、変化して更新されていくのではないか。リモート授業というのは前の年度までは行われていなかった。実際に実施してみる中で、対面と併用して運用できる可能性があると同僚と話をしている。

勝地副学部長

リモート授業について、学生からの反応も肯定的なものや否定的なものがある。移動しなくて良い、繰り返し見られるので復習がしやすい、オンデマンドでは分からない所で一度止めて、調べてから見ることができる、といった点が肯定的な意見のうち大きな割合だと受け止めている。教員としても同様に感じていて、さらに中身のある学習へつなげられる可能性を感じる。

実現できるかは別として、リモートであればスポットで外部の方を招いたディスカッションや講義ができる。海外の大学・研究者・技術者との交流がしやすくなるのではないかと期待している。

周佐委員

川添学部長のグローバルとローカルという話があったが、今回のコロナでグローバルという波が一頓挫したのは間違いないと思う。その中で、世界の中での分断や、都市の中

での分断がどうなっていくのか関心がある。先についての予見はできない。
人の働き方という観点では、リモートワークは嫌でも進むという感触がある。多様な属性の人を活用する機会になるかもしれない。

青木委員

コロナの1年を様々な対応で乗り切ったのだと思う。4月以降は対面を原則として遠隔と併用するというので、木更津工業高等専門学校でも近い形で進めて行こうとしている。資料を見て、学生から率直な意見が出ていると思う。自分自身もリモートで授業を行って感じるが、この形式にすると学生が意見を言いやすいのかと思う。学生の率直な意見を、活かせるところを活かして進めて欲しいと思う。

4. その他

○令和3年度の評価について

川添学部長から、3月31日（水）までに評価シートを提出していただきたい旨、依頼が行われた。